

社会人における同一性地位と心理的ストレス反応との関連

小谷典代¹⁾ 伊東三四²⁾ 佐野勝徳³⁾

IDENTITY AND PSYCHOLOGICAL STRESS RESPONSE IN WORKING PEOPLE

Fumiyo KOTANI, Mitsuyo ITO and Katsunori SANO

Abstract

The purpose of the present study is to examine a status distribution of the working people and to clarify the relationship of psychological stress response with life style, the type and position of occupation and developmental state of ego-identity

The subjects are 347 working people such as salesclrk, office worker, the teaching staff of school and researching staff of the company.

The items of the questionnaire are age, sex, educational qualification, life style both in child hood and in the present. We also used identity-achievement scale and PSRS(psychological stress response scale) by Niimi et.al. (1990).

From the result obtained by identity-achievement scale, subjects were categorized the following 6 groups: Identity Achievement Status(IAS), Identity Achievement-Forclosure Intermadiate status(AF), Identity Foreclosure Status(FS), Moratorium Status(MS), Identity Diffusion-Moratorium status(DM) and Identity Diffusion Status(DS).

The main results are as follows:(1) DM represented about 45% in 20-30 age group and 39% in 31-40 age group. (2) DS that may related with the apathetic syndrome, was about 8% in the two age groups. (3) The level of psychological stress response was related significantly with the type of occupation and its position, and identity status. The mean value of psychological stress response was highest on IDS. (4) There was no significant correlation between life style in child hood(about 10 years old) and the level of psychological stress level, although in our previous studies with students of junior high school and university, the correlation between the two parameters was significant.

KEY words Working people, Identity, Psychological stress

-
- 1) 徳島県庁
 - 2) 徳島大学名誉教授
 - 3) 徳島大学総合科学部行動科学大講座

はじめに

日常生活の中で発生する様々なストレスを査定する標準化された質問紙が数多く作成されてきている。それらはストレスに関するもの(Holmes and Rahe, 1967, Horowitz et al., 1979, Johnson and McCutcheon, 1980, Linn, 1986その他), ストレス反応に関するもの(Derogatis et al., 1976, McNair et al., 1971, Weis et al., 1984, 鈴木ら, 1995)及びストレス耐性やストレス対処法に関するもの(加藤, 1988, Byrne, 1961, 久田ら, 1989, 今出, 1996)に大別される。

これらについて、新見ら(1990)は「ストレスに関するこれらの尺度では、あるライフ・イベントが個人にもたらす影響、すなわち個人の心理的ストレスを客観的に評価できない。またストレス反応に関する一連の尺度で測定される不安・抑うつなどの情動的反応は、研究者が心理的ストレスを代表する反応と仮定して選択した反応であるため、個人がストレスを経験したときに実際に示す反応ではない可能性や、心理的ストレスを構成する要素の一部にすぎない可能性がある。つまり、これまでの研究で使用されてきた尺度は、心理的ストレス反応を測定する尺度として妥当性が低いと考えられる」と指摘している。こうした欠点を補い、心理的ストレス反応を的確に把握しうる尺度を作成するための調査研究を行い、情動的反応(4下位項目で構成)と認知・行動的反応(9下位項目)からなる心理的ストレス反応尺度(PSRS: psychological stress response scale)を開発している。本研究の目的は、新見ら(1990)らによる心理的ストレス反応尺度を用いて、青年期の発達課題の1つである自我同一性(identity)の確立過程とストレス反応度との関連を調べることである。

Erikson(1959), identity論の中で「自分」というものを、内省によって自覚される主観的自己(意識)のみにとどめず、むしろ親、社会、他人との相互的な関わり合いのなかで自覚され、評価される社会的な自己(mutual self)として捉えている。そして「自分は・・・である」という社会的自己を選択、限定し、社会に位置づけることで人間は、identityを確立していくと述べている。すなわちEriksonのいうidentityの確立とは、さまざまな相互関係のなかで自分らしさの理解、自分の可能性と限界の自覚、統一的な自己のイメージをもった状態を意味している。

このidentityの確立の時期は、しばしば「心理社会的エトリアム期」とよばれる。エトリアム期の青年たちは、この猶予状態の中で様々な社会的遊びを行いながら、「自分は何者であるか」「自分は何になりたいのか」・・・といった自己選択、自己定義を行う。そして最終的に自分固有の生き方を見つけ、identityを獲得し、このエトリアムに決着をつけておとなへと成長していく。青年期からおとなになるということは、もはや遊びではない特定の社会的自己を確立し「これが本当の自分だ」と選択した「・・・としての自分」に自己を賭け、特定の社会集団や組織や歴史的世界と、結びあうことである。

このようなエトリアム期は、一定の年齢に達すると集結するというのが、従来の見解であった。それはおおよそ22-23歳ごろとされていた。しかし、高学歴化や管理社会化している現代では、エトリアムは確実に延長傾向にある。かつて22-23歳ごろまでとされてきた青年期は今や30歳くらいまでに延長し、したがって30歳頃まではまだエトリアム状態にあると思われ、またそうでありたいと願う青年が増加している。小此木(1979)は、「エトリアム人間の時代」の著書の中で、現代社会が輩出した、青年期に自我同一性を確立できずに、その拡散といわれる根無し草のふるまいをする青年のことをエトリアム人間となぜしている。エトリアム人間とは、

「何事に対しても、その時、その時における当事者であることを避け、自分はその時と所で、あくまでも仮の存在であり、「本当の自分」はそっと棚上げにしておき、いつでも立場をかえ、自分自身を変身させる余地をのこしておき、一貫した主義主張をもたないか、もたないふりをして、特定の党派、集団にすべてを賭けることを避ける者」（小此木, 1979）のことである。

この現代の青年期の延長をもたらしている要因としては、EPI7M期間中に継承されるべき技術・知識の高度化による習得期間の長期化と、青年期=EPI7M時代の居心地の良さがあげられている。これらの要因が相まって、EPI7M状態をいつまでもつづけ、青年期に区切りをつけておとなになることを嫌い、避ける青年が増え、またたとえ表面的には就職、結婚していても心のなかでEPI7M状態をつづける青年が目立ってきた。この社会的現象は見逃せない重要な点であろう。

周知の通り、種々のストレス状況に遭遇したとき、生体に生ずる非特異的反応の程度やその対処反応の様式には個人差が存在する。最近になって、ストレス反応における個人差の問題、さらに個人差を考慮にいれたソーシャルサポートのあり方の問題等が心理学の分野を中心に精力的に研究されるようになってきた(Asendorf et al., 1983, Jamner et al., 1988, 山野他1991, 神村1996, 山崎1996, 今出他1996)。その主なものは、個人の性格特性との関係、行動タイプとの関係、生育史との関連などである。一方、同一性地位とストレスとの関連については、大学生を対象とした肌野(1996)や正島(1997)などの報告があるにすぎない。また社会人を対象としたこの種の研究もほとんど報告されていないのが現状である。

そこで、本研究では青年期の延長という、社会的現象を念頭に置きながら、社会人のidentityの確立過程を統計的に明らかにするとともに、このidentityの確立の程度とストレス反応との相互関連を調べることにした。

方 法

調査対象者と調査時期

主に徳島の会社・学校等に勤務する者347名(男213名,女134名)を対象に実施した。調査は、1996年8月～11月にかけて実施された。

調査内容

調査は、独自に作成した調査用紙を用いて、はじめに性別、年齢、家族の人数、最終学歴、職種、勤務年数の記入を依頼した上で行った。内容は以下の通りである。

1. 心理的ストレス反応尺度(PSRS)

この尺度は、新名、坂田、矢富、本間によって1990年に作成されたものである。この尺度は、情動的反応尺度として26項目、認知・行動的反応尺度27項目、合計53項目で構成されている。情動的反応尺度は、さらに「抑うつ気分尺度」(悲壮感・憂うつ・沈うつなどに関する8項目)、「不安尺度」(心の不安定感・不安・恐れなど8項目)、「不機嫌尺度」(不機嫌・行行など5項目)、「怒り尺度」(怒り・不愉快などに関する5項目)の4つの下位尺度に分けられている。認知・行動的反応尺度は、「自信喪失尺度」(自信喪失・自己評価の低下など3項目)、「不信尺度」(他者に対する不信など3項目)、「絶望尺度」(絶望・意欲や希望の喪失など3項目)、「心配尺度」(心配・懸念など3項目)、「思考力低下尺度」思考力の低

下や遅滞など3項目), 「非現実的願望尺度」(自己・他者・事態に対する非現実的な願望など3項目), 「無気力尺度」(無気力・心的エネルギーの欠如など3項目), 「引きこもり尺度」(対人関係の忌避・引きこもりなど3項目)および「焦燥尺度」(焦燥など3項目)の9つの下位尺度に分けられている

質問項目の各々について, 自分に当てはまる程度に応じて「そのとおり」ならば3, 「まあそう」を2, 「いくらかそう」を1, 「全く違う」を0の4段階で自己評定させた。

2. 子ども時代の生活スタイルについて

子ども時代を小学校高学年に限定し, 遊び経験と自由時間を調べる項目等を用意した。遊びについては, 友達と遊んだ経験について, 「たっぷりと遊んだように思う」から「ほとんど遊ばなかったように思う」までの4選択肢から1つを選ばせるようにした。自由時間についても同様の4選択肢を用意した。なお, 自由時間についての設問を「そのころ自分で自由に過ごすことのできた時間(両親や教師などの大人の指示を受けることなく, 友達と自由に遊んだり, テレビを見たり, 本を読んだりしていた時間)は, どのくらいありましたか。」とし, 自由時間の意味するところをある程度明確にした。

3. identityの確立に関する設問項目

これは, Marsia, J. E(1980)の同一性地位概念に基づいて加藤(1983)が作成した同一性地位判定尺度にその下位項目の表現や回答法などの点で一部修正を施したもので, 「現在の自己投入」(自己定義を実現し自己を確認するための, 独自の目標や対象への努力の傾注), 「過去の危機」(いかなる役割, 職業, 理想, イデオロギー等が自分にふさわしいかについて, 迷い考え試行する時期), 「将来の自己投入の希求」の3変数についてそれぞれ4項目, 計12項目からなる。なお, 「現在の自己投入」については目標の自覚と努力を, 「過去の危機」については疑問・迷いと決断を, 「将来の自己投入の希求」については意欲と探索をその内容としている。

回答の仕方については, 加藤は「まったくその通りだ」から「全然そうではない」までの6件法であったが, 本研究では5件法を採用した。そして「かなりあてはまる」ならば5, 「少しあてはまる」ならば4, 「どちらとも言えない」ならば3, 「あまりあてはまらない」ならば2, 「全くあてはまらない」ならば1と自己評定させた。「危機」および「自己投入」が最も高い方の反応を5点, 低い方の反応を1点とし, 4項目の合計得点を各変数の値とした。

調査手続き及び分析

調査は, すべて無記名で行った。あらかじめ本研究の主旨等を説明し, 了解を得た会社等に調査用紙を配り, 回答を依頼した。分析に際して, 心理的対比反応及び遊び・「自由時間」については, 間隔尺度に変換した数値を用いた。

結 果

1. 社会人における同一性地位達成の状況

まず, 同一性地位判定尺度の「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」の各変数ごとに得点を出し, IAS(同一性地位達成), AF(同一性達成-権威受容中間地位), PS(権威受容地位), MS(積極的モトリウム地位), DM(同一性拡散-積極的モトリウム中間

表 1 社会人における同一性地位別分布

	20～30歳以下			31～40歳以下			41～60歳以下		
	男性	女性	小計	男性	女性	小計	男性	女性	小計
IAS	12(18.18)	14(78.89)	19(13.57)	14(23.33)	5(17.85)	19(21.59)	14(29.78)	3(23.07)	17(28.33)
A-F	6(9.09)	11(14.86)	17(12.14)	8(13.33)	5(17.85)	13(14.77)	6(12.76)	1(7.69)	7(11.66)
F-S	6(9.09)	2(2.70)	8(5.71)	7(11.66)	3(10.71)	10(11.36)	6(12.76)	2(15.38)	8(13.33)
M-S	8(12.12)	12(16.21)	20(14.28)	4(6.66)	1(3.57)	5(5.68)	6(12.76)	1(7.69)	7(11.66)
D-M	28(42.42)	36(48.64)	64(45.17)	24(40.00)	10(35.71)	34(38.63)	11(23.40)	5(38.46)	16(26.66)
IDS	6(9.09)	6(8.10)	12(8.57)	3(5.00)	4(14.28)	7(7.95)	4(8.51)	1(7.69)	5(8.33)
計	66	74	140	60	28	88	47	13	60

()内は%

地位), IDS(同一性拡散地位)の6つに分類した。

表1は、31歳未満、31歳以上(41歳未満)及び41歳以上に分け、男女別に同一性地位ごとの人数とその割合を示したものである。31歳未満のIAS(同一性地位達成)の割合は、男性約18%、女性約9%、31歳以上で、男性約23%、女性約18%、41歳以上では、男性約30%、女性約23%となっており、年齢とともにその割合が増加していた。一方自律との関係で問題とされるDM(同一性拡散-積極的モトリウム中間地位)の者(男女計)が、31歳未満で約45%、31歳以上約36%、41歳以上でも約27%に達していた。さらにパシなどの症状と密接に関連するIDS(同一性拡散地位)も8%前後になっていた。なお、41歳以上のデータについては、すでに述べた理由により、これ以降の分析には用いないことにした。

2. 社会人のストレス反応

図1は、職種別に年齢を31歳で区分し、男女それぞれのPSRS値(P-score)の平均と標準誤差を示したものである。営業女子31歳以上については、人数が少なかったため、分析対象外とした。図から明らかな通り、31歳未満では、営業男性のPSRS値が最も高くなっており、次いで事務女性、営業女性の順となっていた。事務男性、教員男女及び専門男女は、営業男女に比して有意に低い値を示した。年齢群間のPSRS値の変化の仕方を比較すると、職種によってかなり異なる傾向を示した。まず営業男子の場合、PSRS値が、31歳未満では高くなっていたが、31歳以上になると、その値が約半分まで減少していた。事務職では、女性が営業男性と同様の変化であったのに対し、男性は逆に31歳以上になると高くなる傾向にあった。

この結果をもとにさらに詳細な年齢区分を行いストレス反応を見たところ、教職及び事務職以外では、25歳から30歳が最も高いストレス反応値を示した。事務職及び教員の男性では、ストレス反応値が経年的に高くなっていった。一方女性の方は25歳から30歳がピークでありその後31歳を超えると急激にストレス反応が低くなるという、男性がと対称的な反応となっていた。

全体としては、営業職が最もストレス反応が高く専門職が最も低い反応にあること、また20歳から25歳の群では、営業職・事務職のストレス反応が高く、一方教員・専門職は極めて低いことが明確にあらわれた点が注目される。

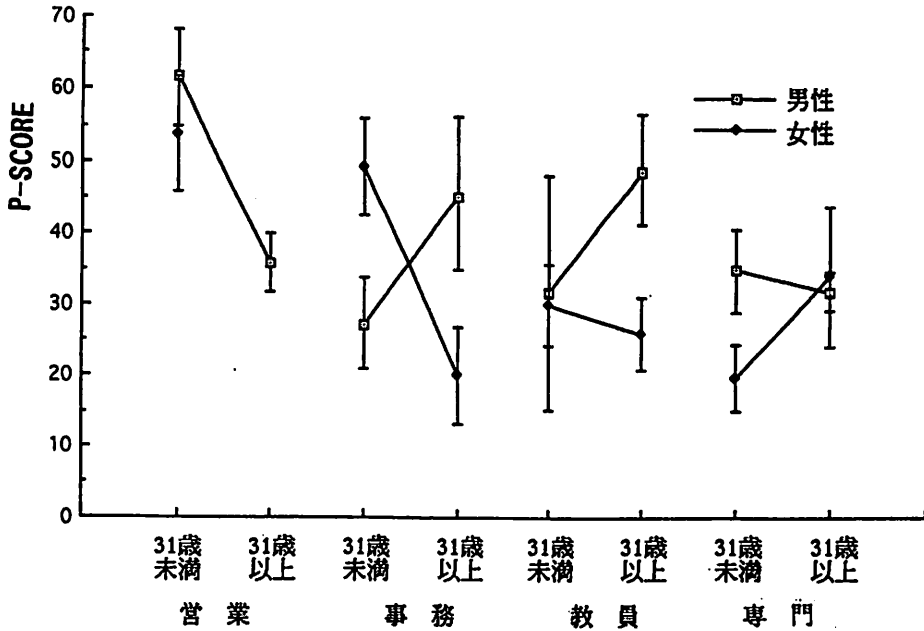


図1 職種・年齢・男女別にみた心理的ストレス反応 (平均と標準誤差)

次に心理的ストレス反応尺度 (PSRS) を情動反応尺度 (抑うつ気分, 不安, 不機嫌, 怒り) と認知・行動反応尺度 (自信喪失, 不信, 絶望, 心配, 思考力低下, 非現実的願望, 無気力, 引きこもり, 焦燥) とに分けてみると, ここでもやはり営業職が情動反応, 認知・行動反応ともに極端に高い値となっていた。教員の男性においては, 31歳以上になると認知・行動反応よりも, 情動反応の方が高くなる傾向が認められた。一方専門職の女性では, 31歳以上になると逆に情動反応よりも認知・行動反応が高い傾向を示した。

3. ストレス反応とidentityとの関連

ストレスとidentityとの関連 (31歳未満のみ) をみるため, 6つの同一性地位毎にPSRS得点についての分析を行った。

図2は同一性地位の段階別にみたPSRSの平均得点 (P-score) と標準誤差を男女別に示したものである。男女ともIDS (同一性拡散地位) でストレス反応が最も強くFS (権威受容地位) が極端に低くなっていた。またFS (権威受容地位) を除けば, 同一性地位が確立されていない者ほどPSRS値が高くなる傾向にあった。この結果について2要因の分散分析を行ったところ, 主効果I (同一性地位) と主効果II (男女) が各々1%水準 ($df=5, F=20.27, p<.01$),

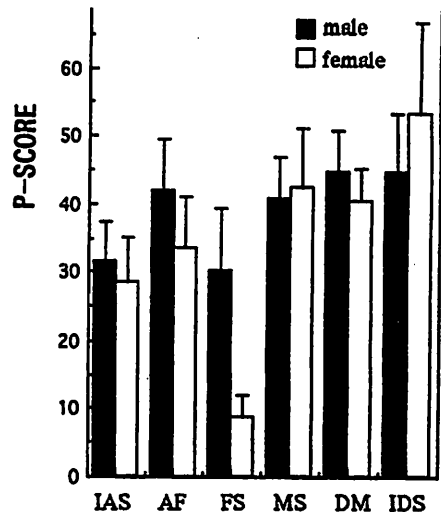


図2 同一性地位別にみたPSRS値 (P-Score)

5%水準(df=1, F=5.52, p<.05)で有意であった。同一性地位ごとに男女間でt検定を行ったところ、AF(同一性達成-権威受容中間地位)およびFS(権威受容地位)では、男性のPSRSが女性のそれに比して有意に高く、一方IDS(同一性拡散地位)では、女性の方が有意に高かった。情動的反応得点(E-score)と認知・行動的反応得点(C-score)の平均と標準誤差を図3・図4に示す。情動的反応の得点は、IDS(同一性拡散地位)を除く全ての地位で、男性の方が女性より高い傾向にあった。分散分析により、主効果I(同一性地位)と主効果II(男女)が1%水準、交互作用が5%水準で有意であった。また、IAS(同一性達成地位)、AF(同一性達成-権威受容地位)、FS(権威受容地位)及びIDS(同一性拡散地位)で男女間に有意差が認められた(t検定による、いずれもp<.05)。認知・行動的反応得点では、男女差は認められず、主効果I(同一性地位)のみ有意であった。これを図から読み取ると、PSRS得点と同様、FS(権威受容地位)を除き同一性地位が達成されていないものほどこの得点が高くなる傾向にあった。

これらについて全体的傾向を見ると、まずPSRSの値が最も高かったIDS(同一性拡散地位)においては、男女とも認知・行動的反応の値が、情動的反応のそれに比して高くなっていった。一方男女差は情動面で顕著となった。またFS(権威受容地位)における明確な男女差は両反応でも変わらないがFS(権威受容地位)の男性は、認知・行動的反応の値が高くなる傾向にあった。さらに、AF(同一性達成-権威受容中間地位)の男性においては認知・行動的反応より情動的反応の値が高くなっていった。IAS(同一性達成地位)とMS(積極的モトリウム地位)では、ともに情動反応で男性が高く、認知・行動面で女性が高くなっていった。

情動反応をさらに4項目(「抑うつ」「不安」「不機嫌」「怒り」)に分けてみたところ、4下位目のなかではFS(権威受容地位)の女性を除いて、「抑うつ」反応の値が全体に高く、「怒り」反応が低い傾向にあった。情動的反応で見られた男女差は、特に「抑うつ」反応と「怒り」反応で顕著であった。

上述した通り、IDS(同一性拡散地位)の男女差は情動的反応において顕著であったが、

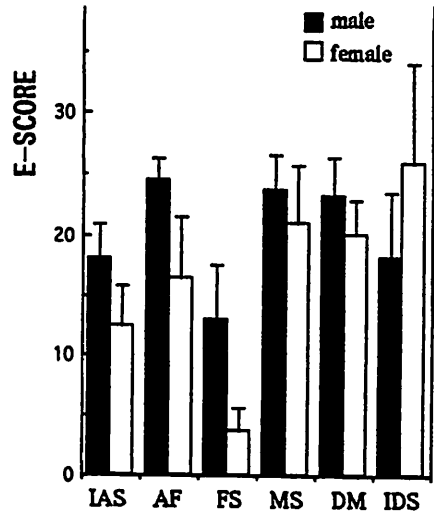


図3 同一性地位別にみた情動的ストレス反応(平均E-scoreと標準誤差)

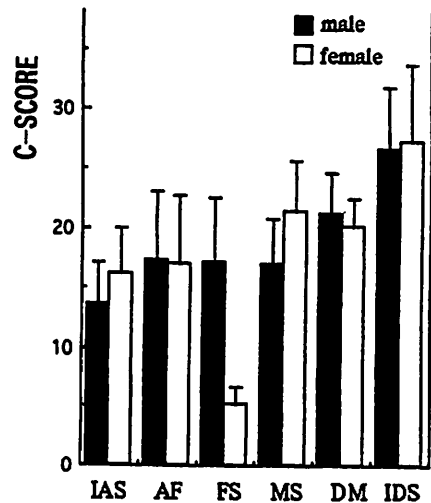


図4 同一性地位別にみた認知・行動的ストレス反応(平均C-scoreと標準誤差)

この点をさらに詳細にみると、その傾向は「不機嫌」反応で最も顕著に現れている。また、FS（権威受容地位）の男女差は、4下位項目すべてにおいて認められるが、なかでも「抑うつ」反応における女性の値が際立って低くなっていた。さらにAF（同一性達成-権威受容中間地位）の男性において情動面が高くなっているのは、特に「抑うつ」反応及び「怒り」反応の値が高いことによるものである。

これら4下位項目について別々に分散分析を行ったところ、主効果I（同一性地位）は、すべて1%水準で有意であった。主効果II（男女）については、「抑うつ」反応と「怒り」反応が1%水準、「不安」反応が5%水準で有意であった。交互作用は「怒り」反応のみ5%水準で有意であった。

次に認知・行動反応をさらに9項目（「自信喪失」「不信」「絶望」「心配」「思考力低下」「非現実的願望」「無気力」「引きこもり」「焦燥」）に分けて分析した。男女別に全体をみていくと、「非現実的願望」反応では、女性の方が、特にMS（積極的モトリウム地位）、DM（同一性拡散-積極的モトリウム中間地位）において高い反応を示している。一方「不信」「無気力」「引きこもり」「焦燥」の4つの項目に関しては、男性の方が高い反応を示した。以上の5項目については、分散分析の結果でも男女に1%水準で有意差が認められた。

男女差がなく、いずれも認知・行動的の値が最も高かったIDS（同一性拡散地位）について、9下位項目毎に比較すると、男性は、9下位項目のうち「不信」反応、「無気力」反応及び「引きこもり」反応において女性より高い値を示し、一方残り6項目では女性の方が高い値となっていた。なお、女性の方が高かった6項目のなかでも、その差が顕著だったのが先にも述べた「非現実的願望」に加えて「心配」反応と「絶望」反応であった。

FS（権威受容地位）の男性の認知・行動的の値が高くなっていたが、これは「思考力低下」反応と「心配」反応が高いことによる。FS（権威受容地位）では、「不信」反応（これのみ男女が逆転）を除く8下位項目全てにおいて、男性の方が女性より高い値となっていた。このほか、AF（同一性達成-権威受容中間地位）の男性が「非現実的願望」反応でどの地位よりも最も高い反応を示したことから、「焦燥」反応のところで、全体的な数値は低いもののMS（積極的モトリウム地位）が高い反応を示したことなどの傾向が認められた。

分散分析の結果、主効果I（同一性地位）は、9下位項目全てにおいて1%水準で有意であった。主効果II（男女）については、「不信」「非現」「実的願望」「無気力」「焦燥」（以上有意水準5%）及び「引きこもり」（有意水準1%）の5項目であった。

4. 同一性地位と子どもの頃の遊び・自由時間について

子どもの頃（10歳前後）にどの程度遊んでいたか（「たっぷり遊んだ」から「ほとんど遊ばなかった」まで4段階）、またどの程度自由になる時間があったか（「たっぷりあった」から「ほとんどなかった」まで4段階）を調べたが、図5は「遊び・自由」（遊びと自由時間の

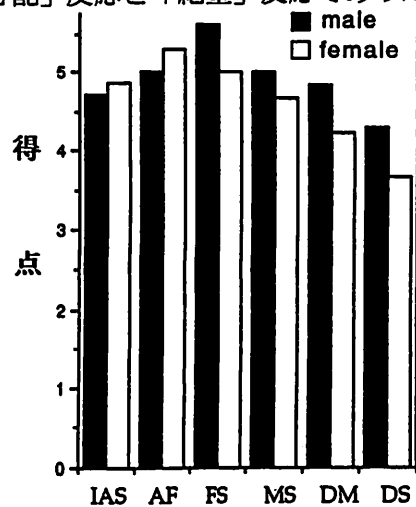


図5 同一性地位別にみた子どもの頃の「遊び・自由時間」の量（評定尺度に基づく）

程度を合わせたもの)の平均値を同一性地位ごとに示したものである。男女ともIDS(同一性拡散地位)で子どもの頃の「遊び・自由」の値が低い傾向にあった。最も高くなっていたのは、男性はFS(権威受容地位)、女性はAF(同一性達成-権威受容中間地位)であった。子ども時代の遊び・自由時間と現在のストレスの間には有意な相関は認められなかった。

考 察

今回の調査で、いくつか興味深い結果が得られたものと思われる。そこで、主な点について、若干の考察を試みることにする。

まず、社会人における同一性地位の達成度では、同一性地位の確立されていないDM(同一性拡散-積極的モトリウム中間地位)とIDS(同一性拡散地位)の割合が高くなっており、なかでも31歳未満においては全体の約5割と顕著であった。

小此木は1979年に「モトリウム人間の時代」という著書の中で、モトリウム期=青年期の延長とそれに伴うモトリウム人間の増加を現代人一般の社会的性格として提唱していた。かつては22、23歳頃までとされていた青年期=モトリウム期は30歳頃にまで延長し、25歳を過ぎても30歳くらいまではモトリウム状態にあると思われ、またそのようなあり方を保ちつづけようとする青年が増えている指摘した。小此木(1979)はこのような青年のモトリウム心理として、「①まだいかなる職業的役割も獲得していない。②すべての社会的関わりを暫定的・一時的なもののみなしている。③本当の自分はこれから先の未来に実現されるはずで、現在の自分は仮のものにすぎないと考えている。④すべての価値観、思想から自由で、どのような自己選択もこれから先に延期されている。⑤従って、すべての社会的出来事に当事者意識を持たず、お客様意識しか持とうとしない。」などの特徴をあげている。

今回の結果は、青年期に決着をつけ付け社会に自己を位置づけることを嫌い、いつまでも青年で居続けたいというモトリウム期延長の願望が若いサラリーマンを中心に内面の心理として潜在していることを示唆するものである。モトリウム状態をいつまでも際限なくつづけ、青年期に区切りをつけ付けになることを嫌い、避ける。万年青年が次第に増え、たとえ表面的には就職したり結婚したりしても心の中では依然としてモトリウム心理を抱きつづける青年が目立ってきたことへの懸念は15年を過ぎた今も、何ら改善されることなく継続し、むしろモトリウム人間の心理構造が社会的性格として、定着していることが裏付けされたように思われる。しかし、この調査に用いた加藤(1983)の尺度の妥当性の問題など、今後検討すべき課題が残されていることも事実である。

次に職種間でストレス反応の度合いを比較したところ、営業職の者の値が最も高くなっていた。しかし、年齢とともにその値が減少する傾向が認められた。

これは営業においては、ほとんどの仕事がノルマ制であり自分に対する会社の評価はどれだけの時間働いたかではなく、結果としての数字(営業成績)だけで判断されることや、対人関係を第一とすることから、ストレスが蓄積しやすいのではないかと推察できる。また、31歳未満で特にストレス反応が強いのは、学生時代の、比較的自由な環境とは一変した、生活様式の変化(通勤ラッシュや、社会人として守るべき規律など)のなかに自分を適応させつつ、与えられたノルマや役割をこなさなければならないという状況に置かれるためと考えられる。もう1つには、高学歴化や管理社会化している現代のもたらしたモトリウム期の延長を考えると、

ちょうどこの時期（入社～30歳）は社会人としてのidentity、職業人としての自己を確立する時期にあたり、従って、ストレス反応がより強くなっているのではないと思われる。

事務職、教員の2職種においてストレス反応の値に高低差はあるが男性が経年的にストレスが増してくるのに対し、女性は25歳から30歳をピークに以後減少するという傾向が認められた。この点に関し、職場のストレス因として、地位の向上とともに変化する立場や役割への適応をめぐるストレスが考えられる。特に30歳を過ぎた頃からは、それまでのように与えられた仕事を忠実によく果たすだけでなく、管理職的な機能が要求され、自分に課せられた責任や的確な判断力といったものを強く意識するようになる。

一般的に昇進は、組織の中での権限の拡大や自己の有能感（competence）の確認をもたらすとして多くの場合人々に良い影響（ユーストリス）を及ぼすと考えられている。Herzberg(1966)の職務満足に関する2要因理論（two-factor theory）でも、昇進は課業の達成や、上司からの承認などとなって職務満足をもたらす動機づけ要因として位置づけられている。しかし一方で昇進は人々に悪い影響（ディストリス）を及ぼすことも事実である。昇進の結果起こる、重責感や周囲からの期待感がある一定の限度を超すとさまざまなストレス反応を起こす。特に板挟みになりやすい中間管理職でこの傾向が強いといわれているが、今回の結果でも中間管理職にあたると思われる31歳～40歳群においてストレスが強くなっておりこれらの見解と一致するものである。

Kyriacou et al.(1978)が「教員ストレス（teacher stress）」と呼んだように、教員においては上記のストレス因に加えて、いじめなどの多発による心労や学校内外での仕事量の増加に伴うストレス因が考えられ、教員の心理的ストレス反応は高いであろうと予測した。この傾向は、男性教員において一部認められたが、営業職や事務職に比べれば相対的に低い値を示していた。

次に、男性とは対照的に女性のストレス反応が経年的に下降傾向を示したことについて考えてみる。このような性差が生じた背景には、男性勤務者の方が、圧倒的に管理職に就くことや職場からの期待が男性により多く寄せられていること、厳格な男女の目的分業という社会的風潮が存在することは否めない。大半の女性は年齢とともにこういった風潮を容認するもしくは容認せざるを得なくなり、結果日常の関心事は次第に職場よりも家庭内に向けられていくように思われる。

最後に、営業・事務職の20-25歳群のストレス反応に比して、教員・専門職のストレス反応が低かったことに関して検討する。考えられる理由としてはそれぞれの職種に対する就職前の想像と就職後の現実との間に生じるギャップがあげられる。営業や事務職は会社の中でも配属される課によって全く異なる仕事を任せられることが少なくなく、従って本人の抱いていた仕事内容と一致する場合はともかく一致しなかった場合には、理想と現実の狭間で苦しみながらも強制的に適応していかなければならないという状況に置かれる。このことがストレス反応の値をあげている要因の1つになっていると考えられる。

一方、教員や専門職はどうであろうか。教員を志す者は大学という準備期間の中で必要な科目を履修し、教育実習において専任教員の指導の下で教壇に立つという体験をする。最終的に採用試験をクリアする事により準備期間を終え、本番を迎える。専門職においても同様に、ある程度身につけなければならない知識を習得した上で就職を迎える。この準備期間や実習体験が設けられていることがギャップを最小限にとどめていると思われる。

子ども時代の過ごし方(遊びや自由に過ごした時間など)とストレス耐性度の関連についても調べたが、両者間に一定の関連は認められなかった。肌野(1996)および正畠(1997)の大学生の調査では、これら間に有意な正の相関関係が認めている。このことについて、今のところ適切な考察を持ち合わせていないが、今後さらに詳細に検討する必要があるものと思われる。

今回の調査のもう1つの目的であるストレスとidentityとの関連を調べるため31歳以下の者を6つの同一性地位群に分け、心理的ストレス反応尺度の13項目それぞれについて分析を行った。

同一性地位とストレス反応度との関係を見ると男女ともIDS(同一性拡散地位)のPSRSの値が最も高く、男性においては認知・行動的反応尺度の「無気力」反応、「引きこもり」反応および「不信」反応が、女性では情動的反応尺度の「不機嫌」反応、及び認知・行動的反応尺度の「非現実的願望」反応、「心配」反応、「絶望」反応で顕著であった。一方FS(権威受容地位)のPSRS値が最も低くなっていた。

学生を対象に同様の調査を行った本学生の正畠(1997)の報告でもFS(権威受容地位)が最も低くなっていた。しかし学生では、MS(積極的エトリウム地位)が最も高く、IDS(同一性拡散地位)はそれほど高くなかった。この点はわれわれの結果と一致しなかった。

FS(権威受容地位)においては女性の反応値が極端に低く、ここに明確な性差がみられた。これは、肌野(1996)の学生を対象とした調査結果と一致するものである。またAF(同一性達成-権威受容中間地位)の男性におけるストレス反応値が同一性達成群のわりには高いことが認められた。

学生に比べて社会人はIDSのストレス反応値が高くなっている理由としては以下のことが考えられる。学生時代は「エトリウム期にある」といわれるが、その言葉通り、社会の義務や責任といったものからは少し離れた場所におかれており、ある程度自由の身かつ現実逃避可能な身である。例えばそれは大学の講義にほとんど来ないでアルバイトに専念する学生たちの姿からも伺える。彼らは「大学」という場に身をおくことが嫌になると、より好ましい場(アルバイト先)へと身を移す。すなわち「大学」という現実から逃避することで日常の中での充実感や満足感、あるいは「自分という存在」を維持することができる。またそのような行為に対し誰に何を言われるわけでもない。

以上のことから学生においては、たとえ同一性地位が拡散にある若者でも、ストレス状態からかろうじて逃れられていると言えよう。しかし、ひとたび社会人になると生活様式も立場も一変する。社会人としての規律や責任が当然のように要求される。毎朝決まった時刻に仕事に就き、一定の役割を与えられる。このような生活様式の変化や社会人としてのとるべき行動などは、identityの確立されている者でもすぐには適応できない。これが、過去に危機を経験することなく、また将来における自分の方向付け(自分は何をすべきかなど)ができていないIDS(同一性拡散地位)においてはより深刻で、一応就職しても会社員として行動しなければならないことの1つ1つがストレスとして強く感じられるようになる。しかも、学生の頃のように様々な場に自分を逃避させることは許されない。入社後、周囲で帰属意識が高まり会社員としての規律や責任が増す時期がくるほど逃げられない状況の中で男性では無気力感や引きこもり、不信感を、女性では非現実願望や心配、絶望感を強く抱き苦しんでいるのではないかと思われる。

